

生命情報論の展開 個人から生命流へ

Development of Life Information Theory: From Individual to Dividual

西垣通×ドミニク・チェン

Toru Nishigaki × Dominick Chen

機械情報還元主義の外へ

ドミニク・チェン——今号の特集「情報生態論——いきるためのメディア」では、普段原稿をあまりお書きにならない、ものを創ることが多いアーティストとエンジニアの方々に執筆いただき、新しい方法論を構築していこうと意図しています。

その大枠を考えるにあたって、まず西垣通先生がこれまでに書かれた論考への根本的な共鳴がありました。非常に大掴みに整理すれば、先生の情報論は生命情報と機械情報をパラレルに扱うのではなく、機械情報も生命情報も社会情報という中間領域を介したグラデュアルな連続であるという関係を感じさせてくれるものです。私は現代社会におけるアーティストとエンジニアの活動とは、いわゆる工学的な機械情報還元主義の外へ出るために、生命情報を志向するオルタナティブな役割を担っているのではないかと考えています。

はじめに私の最近の活動を紹介させていただきますと、東京都写真美術館で行なわれた「文学の触覚」展(2007年12月15日-2008年2月17日)に《タイプトレース道——舞城王太郎之巻》という作品をアーティストで今共同経営者の遠藤拓己と出展しました。キーボードと映像のみというすごくシンプルな実装ですが、先生の言葉をお借りすれば、機械情報のなかに生命情報を逆流して挿入することを企図しており、執筆者のプロセスが時間軸上で保持・記録される仕掛けを持っています。つまり展覧会では、作家の思考プロセスや漢字変換、タイプミスといったものまで

べてが見えてしまう。したがって本来はすごく恥ずかしいわけですが、覆面作家としても知られる気鋭の小説家、舞城王太郎さんに特別に参加いただいて、新作の小説を2カ月間にわたって書いていただきました。この作品についてはまだ主観的な評価しか得られていませんが、画面越しに作家の息づかいや気配を感じるというような感想を多くいただきました。そうした点にこそ、人間がITロボットと化さないためのヒントが隠れていると思っていて、現在はこのコンセプトをウェブ・サービスに利用することを目指し、株式会社ディヴィデュアルという会社を興しました[1]。

サービスの基本に、グレゴリー・バイトソンのいう「プロクロニズム」という考え方があります。「プロクロニズム」はバイトソンが考案した概念ではなく発生学や胎生学(embryology)の分野の言葉ですが、簡単に言えば、生物の成長パターンが形態学的に表出することを指しています[2]。

西垣通——時間的なものが形態として表われてくるということですね。

チェン——はい。西垣先生の言葉で言うと、歴史性、あるいは時間的累積性です。つまり時間的累積性をいかにしてコンピュータ上で共有でき

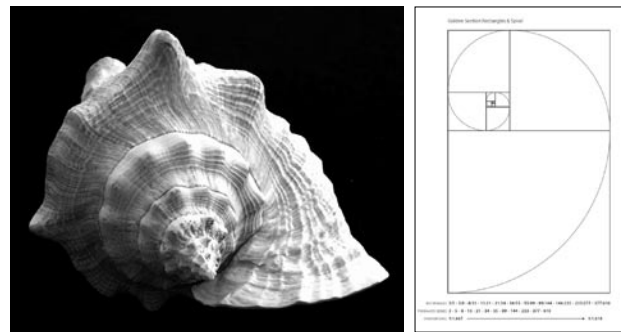


fig.1——プロクロニズム——法螺貝とフィボナッチ級数の関係
引用出典=[法螺貝] Photograph by windflower43, webshots.com
[フィボナッチ級数] Golden-Section.png, Wikimedia Commons.